

## 【 講演企画書 】

■目的:これから訪れる多死社会が恐ろしく悲しい時代でとなるのではなく、「いい人生だった」「あんな最期いいよね」といえるような『死と上手く付き合っていく時代』となるためのサポートができる医療介護職を増やす。

■本企画におけるゴール:「看取り」における事例を通した講演を聴き、様々な捉え方を知ることを通して、「看取り」時の自分の行動を具体的にイメージし、明日からの業務に変化をもたらす。

■対象:医療・介護・福祉職など

■内容:仮に 90 分の講演会を想定しています。  
テーマ『いのちのおわりの向き合い方』

講演内容(予定)

- ・幸せな死の捉え方:悲しみの海を乗り越える手段  
『NOA の方舟』→「N:ぬくもり」「O:思い出」「A:ありがとう」
- ・看取りを支える側に知っていてほしいこと  
『たからもの』→「た:助け」「か:環境」「ら:LOVE」「も:物語」「の:呪い」

など

◇備品 御社準備:スクリーン・プロジェクター  
スタイドなし、講演のみの場合はホワイトボード使用  
配布資料の印刷(事前に後閑がメールで送付します)

■概算のお見積り

法人様からは講演料10万円以上からお受けしていますが、御社の規定に沿って対応することも可能です。別途交通費(JR 熊谷駅起点で会場まで)が必要になります。

■備考

- ・講演の時間は 30 分から 180 分まで対応可能です。
- ・ご希望に応じて柔軟に変更可能です。遠慮なくご相談ください。

■本件連絡先: 後閑愛実(ごかんめぐみ)

Mail: [zap11614@gmail.com](mailto:zap11614@gmail.com) TEL:080-1396-2805

## ■後閑愛実プロフィール

### 後閑愛実(ごかん・めぐみ)

看取りコミュニケーション講師 正看護師

AHA-BLS/ACLS インストラクター

群馬パース看護短期大学卒業後、2003年より看護師として



病院勤務。1000人以上の患者と関わる中で、様々な患者を看取る。看取ってきた患者から学んだことを生かして、看護師をしながら看取りの際のコミュニケーションの方法を、2013年より研修・講演を通して伝えている。雑誌クリニカルスタディ掲載「死に向き合うとき」の原作執筆を担当(2021年4月号より連載中)。読売新聞医療系ポータル医療系サイト ヨミドクター 掲載「看取りのチカラ」の原作執筆を担当(2020年4月より連載中)



#### ★著書『後悔しない死の迎え方』(ダイヤモンド社)

死に際したとき、本人やその家族は何を思い、何を感じるのか。15年間にわたり医療現場で1000人以上の患者に関わってきた看護師が体験した、現実でのさまざまな死の迎え方を紹介しつつ、死に際した本人や家族にとって後悔を残さない最期の迎え方の秘訣を具体的に説いていく。経験豊富な看護師ならではの視点でメッセージを投げかける。死を考えることで“いま”を見つめるきっかけになる 1冊

### 【研修・講演 依頼実績】

丹波市立看護専門学校(兵庫)/坂出医師会(香川県)/SORA 訪問看護ステーション(大阪府)/福島県介護支援専門員協会(福島県)/埼玉県委託セミナー(埼玉県)/山岸和敬荘(岩手県)/いわき市医療センター看護専門学校(福島県)/桶川市役所(埼玉県)/九州ホスピタルショウ 2019(福岡県)/日光市役所(栃木県)/香川県老人福祉施設協議会(香川県)など


### 【メディア】

- ・雑誌月刊ナーシング連載「まんがでわかるはじめての看取りケア」(2020年終了)
- ・インタビュー記事掲載  
新聞→朝日新聞/毎日新聞/上毛新聞/山口新聞/福井新聞/東京新聞など  
雑誌→看護展望/サンデー毎日/週刊現代など
- ・テレビ NHK「首都圏ネットワーク」で活動が紹介される。

【ホームページ】 <http://www.megumitori.com/>

## ■参考資料

### 【講演参加者の感想（医療職）】

- 介護職員は、看取りについて… いや、私は罪悪感が心を埋め尽くすことの方が多く、あの時好きなものを食べてもらっていたら…もっと体調をしっかりと看護師に伝えていたら…もっと、看取りの時に出来るケアはないのか？そんな宿題を持っていきましたが…あ！そういう風にとらえているんだ！なるほど、私達が出来ることは普段のケアにあったし、本人と家族それぞれに対しても死に対する考えの違い、現場にいる後閑愛実さんだからこそとても伝わりやすい話だった…（介護職 男性）
- 
- 在宅で多く看取りましたが、ずいぶん足りないことばかりで、NOA KAMI の話を心したいと思います。日々の忙しさに忘れていたことが多くありました。言葉にすることが大切ということがよくわかりました。医師として最初に看取ったときの初心を思い出しました。（医師 60代男性）
  - 自分に向けて滅びの呪文をずっとかけ続けていたことに気づいた。「環境を整える」という話のエピソード「家では医療者の私がしっかりしなきゃというプレッシャー、病院では親子でいられる」に救われた…「温度のある言葉」で臨床の看護師さんの話を聞けることは、貴重な機会となった。今日、来てよかったの一言です。帰って、家族と話をしようと思います。（看護師・30代女性）
  - 死の時期は医師をはじめとする医療者側が決めるのではなく、家族が決めるという視点（空気が変わったら）は非常に衝撃を受けました。看取りとは「有難う」とのイメージが理解できました。（ケアマネジャー 50代男性）
  - 今までもやもやしていたことがパツとはれた気がして、看取りに対しての恐怖がなくなりました。できる限り職場で広めたいと思いました。（介護職・30代女性）
  - 少しの状態、表情の変化、バイタル等、詳しく看護師へ報告ができていたらもっと生きることができたのではないかと看取りの際に思うことがありました。ですが、今日の講演を聞いて、自分自身の考えが少し変わり、肩の荷が下りた気がしました。（介護職 30代女性）

## 【講演参加者の感想（看護学生）】

- 「人を看取る」ということは実際に手を触れてやるものだと思っていたけれど、看取りを支える人も看取りをしていると考えて良い、と言ってもらえたことで、すごくうれしかった。（入学する前に、介護の仕事や療養病棟のケアワーカーをしていたので、看取られる人をたくさん見てきたけど、自分が看取りに参加できているとは思えなかったから）（1年生）
- 講演の前は看取りは死亡する時間を共にすることだと思っていたが、それまでのかかわり自体が看取りであると考え方が変わった。（2年生）
- 私は今まで看取りに立ち会ったことがないので、看取りのイメージでは死ぬ瞬間に間に合わせる大切なのだと思っていましたが、それよりも看取るまでの過程が背景を考慮して看取りの場を良い思い出として心に残せるように整えていくことが大切なのだとわかり、看取ることのイメージが変わりました。（3年生）
- 感動的なお話で泣いてしまいました。具体的なエピソードがあり、とても分かり易かったです。今後「終末期」の実習が始まるので、先生の講義を思い出して患者や家族の納得のいく“寄り添えられる看護”を行なっていきたいです。また私は思ったことが顔に出やすかったり言葉にしてしまうことがあるので、考えて行動していきたいです。（3年生）
- 自分の祖父が亡くなった時のこと。祖父は前日の昼間、くも膜下出血で倒れました。この時の私の気持ちとしては、前に一度倒れたけど、元気になったし、今回も大丈夫だろうと思っていました。しかし次の日の午前4時ごろ、電話がかかってきて病院にかけつけると、なんの波形もないモニターが目に残り、間に合わなかったと思いました。涙が出ることはなく、ただ見ているだけでした。しかし、管がはずされ看護師に声をかけられ、手を触れた瞬間、一気に感情が溢れました。まだあたたかい祖父の手に触れ、間に合わなかったという気持ちはなくなり言葉をかけることができました。「NOAの方舟」を聞いて、思い出しました。これから先、患者さんの生活背景によっては厳しい場合もあると思いますが、患者さんが最善の物語の完結を向かえられるよう、残された患者さんが患者さんの思い出と共に、物語が続いていくような関わりをしたいと思いました。（3年生）

## 【後閑の講演 過去の参加者の感想（一般）】

- 価値観の違いの説明がうまく、納得した。ああしておけばよかったという思いはあるが、でもその時は精一杯やっていたので、今日の話の中で救われた。残り10年ほどだと思っている人生に、悔いのない人生を送りたい。豊富な経験からのお話、なるほどと思うことがたくさんありました。（民生委員 70代女性）
- 大切な人のことを思い出し、涙が止まらなくなりました。自分が妻にしてきたことが良い看取りになったと思い、安心しました。妻と育んできた愛を活かして、残りの人生を後悔なく生きていきます。（自営業 40代男性）
- 参加する前は、病院は病気を治療するという勝手なイメージだけでしたが、死を見守ってくれる看護師さん、患者にとっての幸せな人生の終わり方を真剣に考えてくれている看護師さんがいるんだということを初めて知りました。感動しました。（高校生 10代男性）
- 一つ一つの事例に、ああそれはできていた、これもできていたと答え合せをしているような感じでお話を聞くことができました。家で最期を迎えることを希望し、家族も医療関係者も、犬も力を合わせて娘を見送ることができました。病気がわかって亡くなるまでの5年間、毎日がドラマチックでした。生きようとしていた姿勢が有難かったです。看取る側だったけれど、自分もいつかその立場になることを忘れずに、精一杯生きていきたいです。（無職・50代女性）

## ■医療介護福祉職、市民、学生など、

参加対象者によって講演の内容をカスタマイズできます。

お気軽にお問い合わせください。